

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	クリミヤ戦争始末（續）：雑録
Author(s)	廣田，直三郎
Citation	龍南會雑誌，28：35-42
Issue date	1894-06-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4413
Right	

漢事始六卷 同上

和漢名數三卷 同上

拾遺和漢名數一卷

雜字類編二卷 柴野栗山の編

群書一覽六卷 尾崎雅嘉の著

以上

右國學の棗、匆卒の際、古今書目につきて、おのか覺えある書をうきつけし者あれば、順序の前後したる、或は部類の錯雜せる、往々これゆれども、今改むるに暇あらず、讀まん人、これを諒せよ、猶るの佳書よして、洩したるは、他日また示さんをりもあるべし、

クリミヤ戰爭始末 (續)

廣田直三郎

クリミヤ本戰 (つづき)

インケルマンの戰後、冬寒頓に來り降雨連日開けず、戰場の進退甚だ困難あれば、此れにて五十四年の戰は終りぬ。聯合軍始めより冬越を期せざりければ、其困却一方あらず。さればクリミヤの役は魯軍よりも恐るべきは、疫癘及氣候輜重の不良ありと云へり。暴風は斷じず黑海を掠め、運送船の破損甚からず。此運送船には聯合軍が冬越に必要なものを滿載したれば、一風は殆んど一戰と其損害等しと云諸品、爲めに沈没せること夥しく、水夫等の溺死も無數あれば、一風は殆んど一戰と其損害等しと云へり。A storm was nearly as disastrous in this way as a battle. 海岸に於ける軍隊の苦惱も之に劣らず、天幕は裂かれ切られ而て吹飛ばされたり。將校も士卒も等しく荒野に暴露せられ、寒に號び

饑に叫べり。當時此役に與うりし人の言を聞くに、裸指を以て金屬製の器具に觸るゝことは、全く能はざりしと云ふ。スクタリー(君斯坦丁の對岸にある小亞細亞の都府)にある聯合軍病院の有様も亦慘鼻に堪へざるものあり。傷兵病卒救助の制度組織は皆無と云ふの外なく、時には藥用器械延滞してバルナに放棄せらるゝことあり、時々はスクタリーにある傷卒に用ひらるべきものが、バラクラバ軍港に碇泊せる船艦の倉庫に積載せられたる儘なることあり。衛生掛の諸吏は其人を得て、甚だ熱心に其職を執り、醫用諸品は能く整理すれども、此等は一も軍醫の手に落ちず、故に熟練ある醫官も手を空くして傷卒の呻吟を聞て愁嘆するのみあり。されば暴劫掠奪稍や行はるゝも、之を禁する能はざる有様なり。或時長靴到着の報あり、就て檢すれば只だ左足分のみありし、此の如きもの殆んど常あり。然れども幸にも病院の一事は新組織成りて、傷士病卒爲に靜に瘡病を養ふことを得たり。此れ實に戰士救助法の一大革命にして、其名譽は全く Miss Florence Nightingale に歸す。嬢は英國の或る富める田舎紳士の娘なり、幼より他婦女と異なり、華美流行を好まず、甚だ政治問題を聞くを喜べり。嬢は一の科學として看病法を學べり、又大陸各國に行はれたる看病法の制度を熟知し、クリミア戦争の起る比ひ、地を倫敦のハーレー街に卜し、一院を建て看病制度を興さんおとを勉め居れり。英の殖民局長シドニー・ハーバート氏、嬢に詢りて曰く、貴嬢若し我言に従ひ、行てクリミアの病卒を看護し給は、看護上の全權を與へ、器具藥品乞ひに應じて政府より支出せしめんと。嬢直ちに之を諾し、同僚婦人數名を伴ひ、スクタリーの病院に赴く。嬢の到着後、病院の制度其面目を一變し、器械看護全く其の宜きを得、兵士等深く之を徳とせし、現今の赤十字社は全く之に濫觴す。

以上は主に英軍の有様を説けり、土軍は之に比して一層の不整頓にて、兵士の苦惱も一層なり。佛は

之に異なり稍々整頓し、其兵食輜重多く期に先ちて至れり、且つ佛人の輕挑ある軍中屢々戯曲を演じ、嘻々として相樂み、常々兵を分て英土の兵に代はり其哨兵たることあり。

此時英の内閣諸大臣其人を得ずして動搖止まず、遂に下院の信任投票に失敗して聯合内閣に茲に倒れ、バルマーストーン内閣成る。然れども動搖尙止まず。

此時境國其主謀となり、再び列國會議を維那に開き、平和を以て此局を結ばんことを謀り、議決を以て魯に請求すれども開らざれば、十二月二日塙は斷然英佛に同盟せり。然れども普國其他聯邦小國動かざるを以て、塙は進んで魯境に入ること能はず、然れども塙の加入が、後ち魯をして速に和を講ぜしむる一因となりしには相違なし。

當時撒丁王國新に興り其基礎未だ難からざれども、時の宰相伯爵カブール策を立て、國民の反對者多きにも關せず、兵を出きて聯合軍に加はれり。撒丁王國は西歐列國と舊來の緣故あるにもあらず、又た魯と仇讐あるものにもあらず、されば此同盟は全く國威を輝かして、歐洲列國の一に加ふるの足場 *Locus standi* を定めんとするに外あらざるなり。而して其結果は意外に其圖に中り、後年全く其目的を達するを得たりき。故にクリミヤ戰爭は以太利建國の基礎を定めたるものと謂つべし。撒丁の將ラマーモヲ兵一万五千(後増して二万五千人)を率て聯合軍にクリミヤに合す。

魯帝尼歌拉全力を傾けて兵を募り、其大軍團を遣はして西城を救はしめしかども、途中雪風に逢ひ死亡大半あり。是より先き魯帝病で床に臥せり、此報を得て大に怒り、急に令を土境の魯軍に下し、ユーバトリヤにあるオーマ侯の軍を攻撃せしむ。千八百五十五年二月十七日、魯將クルレフ大に土軍を歐城に襲ふ、土軍之に應じて奮戦えたれば、魯軍大に死傷を被り遂に退く。帝此敗報を聞き、憤慨遂に崩

す、實に三月二日あり、長子亞歷山太繼で立つ。帝先帝に肖す、戰役を好まずと雖も、今之を止むべきにあらざるば、益々兵を發して同盟軍に當る（初より此時まで魯軍が失ふ所の兵士二十五万人ありと云ふ）。

西城の守將メンチコッフ病で兵を指揮するに堪へざりければ、帝之を召還へし更に公爵ミヘール、エルチャコフを遣はし之に代らしむ。西歐の聯合軍西城の落陷を見ざる間は、退く能はざるは固より其處あるが、殊に佛帝那拿崙は此役を以て帝位の安危を賭するものなれば最も此感あり、是に於て帝は當時佛國第一の築城家砲兵將官ニールをクリミヤに遣はし聯合軍を助けしむ。ニール西城を巡察し、遂に其南郭カラベルナヤをトし、地道を穿て漸次西城に逼る。魯の英將トレンブン之を窺知し、又之に應じて築城法を變じて之を拒ぐ。是より地上地下砲聲轟々晝夜を分たず、此時聯合軍の勢十七万四千、魯軍十五万人とす。四月六日聯合軍急に障壁を去り、五百の大砲を城南に向けしめ、盛んに之を砲撃せしかども、魯軍屈せず、且トレンブン常に自ら巡察し、破損せる砲臺は隨て之を修復せしかば、遂に其發火を默止せしむる能はざりき。

巴黎の市民は西城の久しく陥らざるを聞き、人心稍動搖し、カンロベルを批難するものあり、且つ其英帥と協はざるを以て遂に職を辞し、ベリスジールに譲り、自ら其別將となりて舊師團を督す。六月七日新總督兵を遣はして魯の綠球堡 *Green manelon* を攻めしむ。佛將ボスケー第二軍團を率て之を攻撃し遂に之を拔く。十八日マラコフ堡を襲ふて大敗し死するもの七千人、此時英帥ラグラン虎拉列病に罹り、二十八日遂に卒す。將軍シムプソン之に代て英軍を領す。偶々魯軍も亦一勇將を失ふ、彼のシノープ塵戰の際魯の海軍總督たりしナクヒモフ氏はれあり。氏は例の如く大膽にも雨の如き飛丸

を顧みず、其砲臺を巡視せる際、丸に中て斃れたり。

聯合軍の攻圍法は次第に西城に近進せ、魯軍の位置稍や危きに至れり。聯合軍間斷なく此武歩を以て進み、あは西城の運命指を屈して待つべし、魯軍是に於て此攻圍法を破壊し、敵軍の厚鎖を斷たんとす。八月十六日魯將リード隱かに城を出で大に聯合軍をチュルナイア河畔に衝く。

此方面に於て聯合軍の占領する防勢陣地は四周平地にして、マッケンシー及ヘシューションの兩高地を分つ、幅十町より十二三町に及ぶ。チュルナイア河は其支流とヘシューション山麓を流れ、河淺くして徒渉すべきの地少あからず。其左は則ち一帯の高地にして、監守軍團 Guard の陣地あり、右岸の高地は撒丁兵之を占領し、左岸の高地は佛兵之を守備す。此高地は一体にヘマウーションと稱し一凹谷を以て左岸の高地と隔絶せり。

撒丁軍は戰鬪隊次より云へば其右翼をなし兵一万許り、佛の二師團は中堅をなし、他の一師團は其一半を豫備に、他の一半を以て左翼とあり、監守軍團と攻城軍團とを聯絡せり、總數の監守兵四万人にして佛將ヘルビゾン之を指揮す。

魯軍は其兵大凡五萬人を出す、分て三軍團とす、魯將リード第一軍團に將たり、歩兵三師團にして右翼をなし以て佛軍に當る、魯將リプラン第二軍團に將たり、歩兵三師團にして左翼をなし、以て撒丁兵に向ふ、第三軍團は豫備をなし後方に從ふ、其勢歩兵一師團騎兵三師團あり。魯軍夜マッケンシーの高地より下り、重霧に乗じて佛軍に對して展開し、砲兵の掩護を破り激く大砲を放て戰鬪を挑む。魯の歩兵は銳進し聯合軍の前哨を驅逐し、チュルナイア河を涉り斜坂を攀て上る。監守軍團直ちに集頓し激く魯軍を衝く、魯の右翼にある一師團は大に敗れて走り退き亦戰はず、中央にある二師

團又大に死傷を被り、遂に退走して平地に出で、六時の頃魯の第一攻撃は全く破られたり。是に於て魯兵は其預備隊を前遣え、以て諸師團を援助え、新に攻撃を行ふ、且つ其内の一師團は佛兵と撤丁兵とを分隔せる小谷中に突入え、此兩軍を中斷せんとせまうとも遂に果さず。佛の預備隊亦陣線に入り、再び魯軍を撃て之を破る。九時の比ひ魯軍全く退却す、兵六千を失ふ、聯合軍一千七百人を失ふ。此役や撤丁の兵大に力を奮ひたるの報其本國に達するや、北部以太利全州皆大に喜び狂奔雀躍盛んにカプールの政略を稱したり、恰も六十六年サドリの大捷が、比斯馬克公を獨逸人の崇拜神としたるが如し。然れども伯が其兵をグリミヤに送る策は、其多忙ある頭腦より出でたるものにあらず、羸弱ある可憐の少女——伯の姪こゝ實は此大政略を案出したるものされ。伯初め其策を聞て稍沈思せしが斷然之を決し國民の怨望を顧みず、西歐の軍に加はり、此大名譽を得たり、大切の端は奇微の間に發す識者以て味ふべし。

九月六日聯合軍殆ど同時にマヲコフ及レダンの兩堡を襲ふ。是より先き聯合軍八百の砲門を并列して大に西城を砲撃す、大地摧け迅雷至るが如く住民殆んど感覺を失ふ。トブレブン奇才も、此の如き砲數に對しては亦如何んともする能はざるあり。是に於て此日をトし全軍の總襲撃を行ふ、正午聯合軍の砲聲遽に止むで音あし——英はレダンに佛はマヲコフは兩軍疾馳して肉薄之を攻む。魯軍死守して之を砲撃したれば、英は非常の死傷を被りて退軍せり。佛はマクマホンの帥ある衝擊縱隊、忽ちマヲコフ外郭を敗り遂に之を拔く、佛軍更に兵を分て小レダン及中部バスジョンを襲ふ、死傷七千三百人、英軍亦魯の榴彈を犯して大レダンを攻め復撃卻せらる、死傷二千四百人あり、魯は尙奮戦すど雖どもマヲコフ堡を失ふて永く保つべからざるを知り、南郭を轟壞し殘余の船艦を沈め、西巴斯卜灣

の北岸に退き、灣の東端にある山脈に據りて聯合軍を待つ。The Russians had made of sebastopol another Moscow. 此役ゴルチャコフは其兵一萬三千人を失へり、西巴斯卜城、圍を受くること二百四十九日、是に至て陥る。

結局

西城の陥るや、和陸の聲は聯合の諸國に一時に響渡れり、聯合軍も更に進んで北進するの勇なく、空しく魯軍と對陣するのみ。偶々十月二十八日、小亞細亞にある土軍のカルス城にあるもの魯將ムラビーフに敗られて退城す。

魯帝はカルス城陷落を以てクリミヤの敗を償ふとし、遂に和を講ずるに傾けり、是に於て埃再び主唱となり、英佛埃普土撒の使臣千八百五十六年二月二十六日を以て巴黎に會し列國會議を開く Congress of Paris 是れなり。

三月三十日列國會議議決して曰く、魯は再び其失へる西巴斯卜港を得及び戰爭以前の舊領地は悉く復さるべし、土は又カルス城を得べし、魯は希臘教徒保護の名を以て土の内政に干涉するを禁ず、黒海は中立海とし、魯艦の土に超過するを禁ず、魯の黒海内に軍庫を設くるを禁ずと。此れ聯合軍が血と金とによりて得たる結果なり。

結論

魯人は不屈の人種なり、一蹶して止むものにあらず、彼が君士斯丁にある聖ソヒアの聖院に其十字旗を翻さんと企つるもの、己に二百年の久きに及ぶ、彼の性質として之を得ざれば已まざるべし。然れども世情日に變遷し、當時衰微を極めたる普は、今勃興して五大國の一に加はり、屹然とて其西境

に臨めり。英亦其素志を變せず、疑惑と嫉妬の眼を以て絶へず其運動を監視するを以て、目今の有様にては魯の此目的は實に困難あるものと云はざるを得ず。されば魯が黒海よりする目的は、クリミヤ戦争に因て一挫折を受けたりと謂つ可し。是に於て彼は彼得遺言書に所謂第二策をとれり、故に彼は中央亞細亞に西比利亞東南岸に着々歩を進めて南漸の素懷をとげんとせり、此等は皆英國の利益と衝突するものあり。さすれば此兩國が今後益々其衝突を高め、遂に干戈に訴へて曲直を決するに至るべきは明かある事實とす。而して其争地は今日已み歐洲中に見出す能はざれば、必ず之を亞細亞に於て求めざるべからず、彼等か亞細亞に於て決戦の地を求むるの時、則ち我日本が間に立ちて覇權を握るの時あり矣。

(完)

劍道に就て

擊劍部委員

下山 陸 治

國にして元氣なければ國なきなり。人にして元氣なければ人なきあり。而して元氣の消長に伴ふものは尙武の氣風あり。されば、尙武の氣風如何は、國家の安危に關すること、實に大なりと謂べし。

龍山の麓、白水の湄、讀書の聲松籟水聲と相和する處、時よ千軍鼓噪劍戟相摩し、風噪ぎ浪荒るゝの觀を爲すものあり。此を吾擊劍部の練習場とす。安に處して危を忘れず。常よ凜々たる心膽を藏め、鐵石の体軀を備ふるを以て丈夫の本領とし、勉學の餘暇、劍を練り武を講ず。此尙武の氣風、鬱積して始めて此部を成す所以にして、此部の盛衰如何は、亦以て吾校元氣の振と不振とを卜するものと謂べし。今や吾部日一日に盛大となり、少くもあらぬ器具さへ、常に不足がちにて、爲に委員をして其周旋に隙あかしむ。是れ實に前委員諸君の獎勵、其宜しきを得たるに由ると雖も、抑も亦吾校の元氣、大